日本語学習者の縮約形の習得について
－「知識」と「運用」の差に注目して－

東　会娟

名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生

weinadong@yahoo.co.jp

1 はじめに

日本人は日常会話で、「遅れてしまいました」の代わりに「遅れちゃいました」、「置いておいてください」ではなく「置いといてください」のように、よく縮約形を使う。堀口（1989）ではテレビとラジオ番組の発話データから日本人の縮約形の使用率が平均して 52%であると判明した。しかし、このような縮約形が学習者にとって困難に感じ、上級になってもなかなか上手に使えないのが現状である。本研究では中国人上級学習者（JSL・JFL）を対象に 2 種類の調査を行い、縮約形の使用率を調べると同時に、学習者の縮約形に対する知識とその運用との差に注目したい。

本研究では表 1 に示された 6 つの縮約形とその原形を扱うこととする。

表 1　本研究で扱う縮約形およびその原形

のだ－んだ	ている－てる	では－じゃ
ければ－きゃ	てしまう－ちゃう	ておく－とく

2 調査概要

2.1 調査方法

本研究では口頭調査と筆記調査の 2 種類の調査を行った。

口頭調査は個別面接により行なわれ、録音されている。調査の際に、被験者に下記場面 1 のような会話内容を紙で提示した。相手役（例：場面 1 の先生役）のセリフは、事前に日本人に録音してもらい、口頭調査の際テープレコーダーから流した。被験者には A の役を担当させ、括弧内に提示されていることばを用いて口頭で会話を完成するよう指示した。口頭調査の問題は全部で 18 問、調査時間は 10 分ほどである。

場面 1：　あなたは腹痛で病院に来ています（你因为肚子痛来到医院）[1]。

A：　こんにちは。

先生：　こんにちは。どうしたんですか。

A：　お腹が＿＿＿＿＿＿（痛い）。

先生：　あ、そうですか。……

筆記調査は口頭調査と同じく会話形式であるが、すべて選択式になっている（場

面 7 参照)。10 個のダミー問題を含めて問題数は全部で 70 問、調査時間に制限を設けていないが約 20 分ほどである。

場面 7： 駅でどの電車に乗ればいいかと迷っているあなたが駅員に尋ねてみることに……

A： すみません。

駅員： はい。

A： 国松に＿＿＿＿＿＿＿けど。

a 行きたいのです　b 行きたいんです　c ほか＿＿＿

調査手順として、すべての被験者に対して口頭調査の後に筆記調査を行った。

調査後、口頭調査における被験者の発話した各問題のブランク部分について、筆者と 2 名の日本語母語話者により文字化作業が行われた。

2.2 調査期間および調査対象

調査は 2004 年 6 月から 10 月にかけて行った。調査対象は下記表 2 に示されているように、日本語母語話者（JNS）と日本語学習者（JSL・JFL）の 3 つのグループである。 JSL、JFL ともに日本語能力試験 1 級に合格しているか、それと同程度と担当の日本語教師によって判断されたもので、上級学習者とみなすことができる。

表 2　本研究の調査対象

	日本語学習歴	滞日経験	年齢（平均）	人数（男：女）	身分
JNS	-	-	22.5 歳	30 人(15:15)	大学生/大学院生
JSL	3 年 3 ヶ月	1 年以上	23.1 歳	30 人(15:15)	大学生/大学院生
JFL	3 年 0 ヶ月	無し	21.4 歳	30 人(14:16)	大学生

3 調査結果および考察

下記図 1 と図 2 にはそれぞれ口頭調査と筆記調査の結果が示されている。

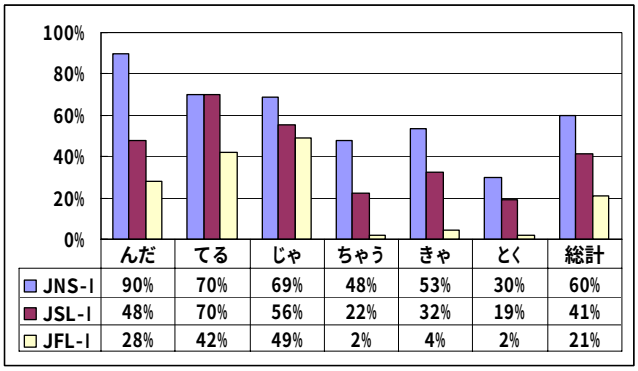
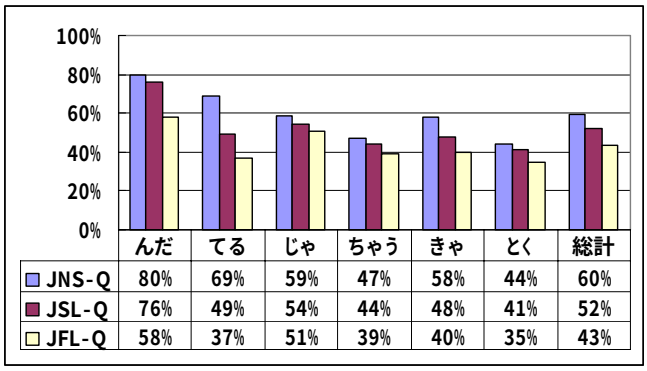


図 1 口頭調査（I）における JNS,JSL,JFL の縮約形の使用率



	んだ	てる	じゃ	ちゃう	きゃ	とく	総計
JNS-Q	80%	69%	59%	47%	58%	44%	60%
JSL-Q	76%	49%	54%	44%	48%	41%	52%
JFL-Q	58%	37%	51%	39%	40%	35%	43%

図 2 筆記調査（Q）における JNS,JSL,JFL の縮約形の使用率

図 1 と図 2 を比較してみると分かるように、日本語母語話者（JNS）の場合、縮約形項目によってばらつきがあるものの、平均では口頭調査（JNS－I）と筆記調査（JNS－Q）における縮約形の使用率が同じである。それに対し学習者の場合は、JSL と JFL の両方とも、筆記調査での縮約形の使用率が口頭調査でより高いことがわかった。対応のあるサンプルの t 検定を行った結果からも、JSL、JFL のいずれも口頭調査と筆記調査との間に有意な差が見られた（JSL[$t(29)=3.810, p<0.01$];JFL[$t(29)=14.538, p<0.001$]）。

さらに、表 3 には各グループによる縮約形、原形および縮約形・原形以外のその他の表現の使用の割合を示している。

表 3　2 つの調査に見られる使用傾向の比較

		筆記調査(Q)		
		Q 縮約形	Q 原形	Q その他
口頭調査(I)	I 縮約形	JNS 50% JSL 30% JFL 15%	JNS 8% JSL 11% JFL 6%	JNS 2% JSL 0% JFL 0%
	I 原形	JNS 9% JSL 5% JFL 7%	JNS 20% JSL 16% JFL 15%	JNS 0% JSL 0% JFL 5%
	I その他	JNS 1% JSL 17% JFL 21%	JNS 7% JSL 20% JFL 27%	JNS 3% JSL 1% JFL 3%

表 3 から分かるように、JNS の場合は、口頭調査で縮約形を使用した人は筆記でも縮約形を選択し、口頭調査で原形を使用した人は筆記でも原形を選択している

ケースが最も多かった（70%）。それに対し JSL の場合、口頭調査で縮約形を使用し、筆記でも縮約形を選択している人は僅か 30% で、それに比べて口頭調査では縮約形でもその原形でもないその他の表現を使用しているが、筆記調査では縮約形あるいはその原形を選択している人は多かった（37%）。一方、JFL は JSL に比べ、口頭調査で縮約形を使用し、筆記でも縮約形を選択している人は更に少なく（15%）、口頭調査では縮約形でもその原形でもないその他の表現を使用し、筆記では縮約形あるいはその原形を選択している人の割合が更に高い（51%）ことが分かった。

以上の結果から、日本語学習者(JSL・JFL)は口頭調査における縮約形の使用率は低いが、筆記調査での選択率は比較的高いことが分かった。つまり、学習者は実際に縮約形を使用することがあまりできないが、選択肢が与えられれば縮約形を選択することはできる。このことから、多くの学習者には縮約形に関する知識はある程度備わっているものの、それが運用にまで至っていないといえよう(2)。それには本調査の場合口頭調査の際の時間制限にも影響されていると考えられる。

しかしながら、今回行った筆記調査は選択形式となっており、その選択肢も 3 つしかないため、たとえ被験者がその縮約形を理解しておらず適当な回答を行ったとしても、偶然に縮約形あるいはその原形を選んでしまう恐れもある。そのため、今回の筆記調査では縮約形を選んでいても、学習者が本当にその縮約形表現について「わかっている」とは限らない。よって、この結論に関しては、今後更なる検証を行う必要があると考えられる。

4 今後の課題

今後も学習者の縮約形に対する知識と理解について、調査方法をさらに検討した上で調べていきたい。

注

1)口頭調査では、学習者に素早く場面提示を理解してもらうために、中国語の訳をつけた。

2)実際別の調査結果から、JSL と JFL とのいずれも教材による縮約形に関するインプットを受けていることが判明した。

参考文献

堀口純子 1989 話し言葉における縮約形と日本語教育への応用　文芸言語研究言語篇, 15, 99-121